

山古志村と錦鯉

会員 吉田 芳春



要約

新潟県古志郡山古志村は、平成16年10月23日午後5時56分に、直下型で震度7という大きな地震に襲われました。山古志村では、家屋のほかに美しい棚田や錦鯉の養鯉池が破壊され、錦鯉が大量に死に、壊滅的打撃を受けました。友人からは、「錦鯉は日本の国魚です。とくに山古志村の錦鯉は全ての点で素晴らしい。錦鯉の販売運動を広く展開することで、山古志村の支援につなげたい。については、ブランドの側面を含めて応援してほしい。」との要請を受けて参加したので、その経過を報告します。

1. 山古志村

新潟県古志郡山古志村は、新潟県のほぼ中央に位置しており、頂上まで切り開いた棚田が美しい風景を映しだしています（写真1）。この棚田は金倉山の中腹から撮影したもので、春夏には棚田の水面が青々と反射し、秋には棚田に紅葉が織り込まれます。冬には豪雪によって白銀の棚田に変化します。本年5月23日に山古志村を訪問した際にも、棚田が醸し出す田園風の美しさに感動しました。この山古志村は、棚田での稲作を中心とする農業が主ですが、「闘牛と錦鯉のむら」のキャッチフレーズの下に、2,402人、703世帯のほかに、角突き牛30数頭、鯉30数万尾が総世帯である特徴を有しています（平成12年3月31日当時）。



写真1 棚田

ところで、豪雪で周りとの行き来を遮断される中越地方では、冬場の貴重な蛋白源として真鯉を食用としていました。特に、山古志村は冬場には陸の孤島と

なるので、農業用ため池や、収穫を終えた棚田に水を入れた棚池、あるいは軒下や床下などに水を引いてつくった池に食用として真鯉を飼っていました。19世紀ごろ、山古志村で飼われていた真鯉は発色し、この発色した鯉が錦鯉のルーツだったようです（写真2, 3）。



写真2 錦鯉



写真3 錦鯉

錦鯉は農業の副業でしたが、昭和40年代半ばからの稲作の生産調整によって、棚田が錦鯉の養鯉池に転

換され、養鯉業が盛んとなり、錦鯉専門家が現れてきました。なお、山古志村は、平成17年4月1日の平成の大合併により長岡市に編入されましたが、本稿では「山古志村」といいます。

2. 錦鯉

コイは学名 *Cyprinus carpio* のコイ目・コイ科に分類され、流れが緩やかな川や池などに生息する淡水魚です。英語では野生鯉が Carp, 錦鯉が Koi と区別されているようです。野生鯉（真鯉）は、黒色の外観ですが、生命力が強く、滋養があるので、昔から貴重な蛋白源とされていました。

錦鯉は色彩や模様、体形などを改良して鑑賞用の鯉として養鯉された変種で、その模様によって紅白、大正三色、昭和三色、黄金、浅黄などに分けられます。色模様などの写真は山古志商工会HPを参照願います。

錦鯉の発祥地については、各地が名乗りを上げていますが、紅白を創りあげた事実からは、少なくとも紅白については山古志村であると推測されます。自然環境、水質、夏でも16℃と冷たい水温・土壌などが錦鯉生産に適しており、そして200年間の長きにわたって親子代々引き継がれてきた錦鯉生産者の匠の技が、多種で最高品質の泳ぐ宝石を生産し続けることにつながっています。錦鯉生産者は、掛け合わせ、選別の仕方、餌、飼育の知恵などのノウハウ集を親子代々にわたって伝承し、親の姿をみて愛情を惜しみなく注いで育てるのが養鯉だと習っています。

錦鯉は、1尾の親鯉から1回につき約30万個から100万個を産卵します。産卵に際しては、縦長タオル地に楕円形穴を交差して開けた産卵用タオル地を用い、親鯉を産卵用タオル地で包んで輸卵管（肛門部位）を楕円形穴で開放し、膨らんでいる腹腔に対して産卵用タオル地を押しつつ輸卵管からの産卵を手助けし、卵粒を人工授精します。訪問した頃は産卵時期だったので、錦鯉生産者の息子さんは3～4時間しか寝る暇がないと笑っていましたが、それほど産卵の手助けには手間がかかっています。

錦鯉は、稚魚から1年目を当歳魚といい、1年間に数回選別されます。残った当歳魚は、山古志村の養鯉池の環境によって将来の模様や色彩などの境界線の基本パターンが決定づけられ、基本パターンはその後に大きく変化しないようです。

3. 中越地震による被害

ご承知のように、中越地震は山古志村の錦鯉に甚大な被害をもたらしました。大半の養鯉池は、柵池が土砂崩れによって埋まったり、あるいは柵堤防が決壊して流されたり、池底にクラックが入ったりなどしたために、錦鯉は80%以上が死にました（写真4, 5）。



写真4 柵池クラック



写真5 大きなクラック

このままでは、日本が世界に誇る錦鯉文化が危うい。錦鯉職人が養鯉業に携わることができなければ、錦鯉の養鯉ノウハウが絶えてしまう。日本国民の多くが何らかの支援をしたいと考えていました。日本全国から善意が寄せられました。日本弁理士会は、会員の皆様から義援金約1,120万円を頂戴し、新潟県に届けています。

山古志村の錦鯉生産者の約9割は、錦鯉産業の復興を決断しました。そして、生産者家族の親子の結束が強まり、この結束が復興への強い原動力になったようです。

4. 復興への課題

錦鯉をビジネスとして検討すると、「安定供給」と「マーケット確保」と「ブランド」とが必須条件でした。

安定供給については、必要な山古志村の養鯉池は絶対的に不足していました。平成17年6月当時におい

て、稚魚と当歳魚の生産は、震災前の7割近くまで回復していたが、養鯉池の完全復興には相当な年月と費用が必要でした。

ここで、錦鯉の飼育に関しては、適切な管理のためには池の水量に対する適切な錦鯉の数が定まっています。稚魚や当歳魚は体長が小さいために小さな養鯉池でも多数飼うことができ、成長に伴って色模様を鮮明に現わしてきます。山古志村は1日の気温の寒暖差が大きく、年間の寒暖差も大きいので、養鯉池の水温にも影響を与えることとなり、この寒暖差が稚魚や当歳魚に対して色模様の境界線をクリアーに仕上げることに寄与しているそうです。当歳魚は、このような環境において錦鯉生産者の長年のノウハウによって飼育され、美しい錦鯉の基本パターンが備わってきます。当歳魚は、選別を経て2年魚となりますが、2年魚又は3年魚は体長が大きくなるので次第に大きな養鯉池が必要となってきます。要するに、当歳魚のみについては安定供給できる最低ラインが確保されていました。

マーケットについては、日本国内の需要は飽和状態で伸びが期待できない状況でした。ヨーロッパでは台湾やマレーシア産が中心でした。そこで、友人の高田容治氏は平成17年初頭に北米市場を調査しました。「アメリカでは、50州のうちで29州に合計103のKOI CLUBがあり、1つのクラブでは平均200名以上の会員を有している。全米の錦鯉愛好家は、約8万人と推定され、安定した増加傾向を示し、全米には約100件の錦鯉ディーラーと約7,000件を越す池造り業者がいる。日本人はステータスとして錦鯉を飼うものと思っているが、アメリカ人にとって錦鯉はペットであり、QUALITY OF LIFEの1つの要素（応接間に絵画を飾るように庭の池に錦鯉を泳がせる）と感じているようだ。」と報告がありました。マーケットとしてはアメリカが非常に有望であることが明らかになりましたが、どのようにしてアメリカへ輸出するのが新たな検討課題となりました。

ブランドについては、平成17年6月にアメリカでの商標調査をしました。

図形と一体化した「KOI」を含む商標登録は存在しており、「NISHIKIGOI」を付記的表示に含む商標登録出願も存在していた（資料1）。アメリカでは、「KOI」、「NISHIKIGOI」は付記的に使用されていることを確認した。したがって、「KOI」、「NISHIKIGOI」が第三者に取得される可能性がなく、商品表示や品質

表示して使用できることを説明しました。

日本国内については、「やまこし錦鯉」、「山古志錦鯉」等の如く錦鯉に山古志を付けた地域団体商標を検討しました。しかしながら、町村合併で村名が無くなるのが分かっていたので、積極的な運動とはなりませんでした。

養鯉生産技術については、池構築・水管理・かけ合わせ・選別・えさ・養鯉方法などが無数に組み合わせられて成立します。しかしながら、養鯉生産技術は、大半が代々伝承されるノウハウに属するもので、特許公開に馴染むものではないとの説明をしました。仮に、特許権を取得したとしても、他の錦鯉生産者の生産した錦鯉が特許権の技術的範囲に属するか否かは、立証が極めて難しいと認められます。よって、日本及びアメリカでの特許権の取得を行うことなく、別な何らかの保護対策が求められました。

なお、錦鯉に係る事業は、農水省・水産庁の増殖推進部栽培養殖課内水面班が所管しています。



資料1 米国商標

5. 山古志生まれのハワイ育ち

錦鯉の当歳魚は、山古志村の養鯉池で飼育されて山古志村産錦鯉としての基本模様パターンが備えられていた後には、水質などが同質であれば、ほぼ同等な養鯉ノウハウを施すことができるので、基本パターンが変化せずに魚体が成長してゆくことが分りました。すなわち、2年魚に対しては、山古志村の寒暖差が必要ではなく、むしろ温暖な水温が成長に望ましいものでした。そこで、新潟県よりも温暖な気候の地域で大きく成長させることが必要になり、アメリカへ輸出することになりました。

ご承知の通り、ハワイは年間を通じて約25℃と安定した温暖な気候ですので、2年魚の飼育には最適で



写真6

あることが分りました。特に、ハワイはアメリカでの有数の錦鯉市場ですので、テストマーケティングに最適な地域でした。ハワイで育ててハワイでマーケティングできることとなります。そして、ハワイのオアフ島（ホノルルのある島）は、山古志村とほぼ同様な水質を保有しており、錦鯉の飼育に適切な軟水であることも明らかになりました。さらに、当歳魚を新潟県から一括仕入れすることで日本からの輸送費を軽減でき、アメリカ本土への輸送費も国内扱いで格安となるなど種々の利点が得られることとなります。山古志村産の錦鯉が海外で育つ環境としては、ハワイのオアフ島がベストであるという結論に至りました。

そこで、オアフ島の内陸部にあるミリラニ（ワイキキから車で約40分）に、錦鯉流通大手(株)三好池によって養鯉池が建設されました（写真6）。養鯉池は、約6万坪（後楽園球場約4.5個分）の広大な敷地に造られ、飼育が始まっており、現在では出荷されています。1つの養鯉池は直径15mですが、養鯉ノウハウが駆使されているので、2年魚は水温25℃という温暖さも伴って山古志村産よりも2倍の速さで成長しています。

6. 知的財産等の戦略

ブランド戦略としては商標登録だけでは十分とは言えず、本質的には新潟産（主として山古志村産）錦鯉の価値が高いと認められ、多くの愛好者が新潟産錦鯉のブランドの業務上の信用を理解しているという共通土俵が備わっていることが必要です。また、特許戦略としてはノウハウとして保護する方針であることから、他の保護利用方策を通じての枠組創りが求められました。そこで、前掲の高田氏が国際錦鯉普及センター（NPO法人）を立ち上げ、新潟産錦鯉の啓蒙・普及に努めることになりました。同センターは、錦鯉の価値の国際標準化を構築することを大きな目的としています。

第1に、海外の錦鯉愛好家が新潟産錦鯉に対して正

しい理解をしてもらうことを促進する必要があります。そのためには、新潟県の生産者と一体的に活動することが求められ、互いに共通の認識を得ています。第2に、同センターは、例えば原産地証明書などを発行し、新潟産錦鯉ブランドを証明するとともに価値基準の統一を図り、高品質の錦鯉に対する市場拡大を図ることにしました。第3に、資格認定の実施と、愛好家を対象として教育活動を行い、併せて錦鯉アドバイザーの育成をしようとしています。第4に、正しい飼育方法や錦鯉生産者発の専門知識をインターネットにより情報提供します。愛好家のニーズに答え、潜在顧客の掘り起こしに結び付けます。第5に、錦鯉データベースを構築し、錦鯉の1尾ごとに略歴をデータベースに登録します。個体識別が図られ、取引に際しての客観的データとして利用できるようにしています。

現状の錦鯉マーケットでは、錦鯉ハンターや愛好家の独自基準によって取引されており、統一的基準が存在していませんし、愛好者や趣味感に全てが支配されていました。上記対応の実施は、錦鯉マーケットにおいて錦鯉を価値評価する際の国際標準化の1つとして機能してくるものと確信しています。

7. おわりに

平成18年10月24日～26日には、「Japan Nishikigoi Expo」と題して、ワイキキのホテルでセミナーが開催され、ミリラニの養鯉池見学も企画されました。小生は妻同伴で出席しましたが、アメリカ本土から参加者が多数集まり、錦鯉への関心の深さが窺われました。

錦鯉を飼育する庭スペースのない小生ですが、ボランティア活動を通して錦鯉の美しさや奥深さを知りました。高田容治氏には、資料提供を受けた上に錦鯉のレクチャーを受け、心より御礼申し上げます。会員の皆様には、駄文に最後までお付き合い頂いたことに感謝申し上げます。

参考文献

- フリー百科事典 Wikipedia 「コイ」
- 新日本図書発行「錦鯉問答」
- 国際錦鯉普及センター作成「資料」
- 山古志商工会ホームページ

写真提供

高田容治氏、岡内完治氏

（原稿受領 2008. 8. 11）